
ゼロの魔神

Fe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの魔神

【Nコード】

N8603Z

【作者名】

Fe

【あらすじ】

かつて魔神ゼラと恐れられていた青年が神様の頼みからハルケギニアへと転生する。だが、その魔神が使い魔として召喚されてしまった！？この話はそんな魔神が織り成す少し変わった物語である！

第一話、神様の頼み（前書き）

いつかゼロ魔のSSを書いてみたいと思っていた自分がいました。

その願いがやっと叶いました！！

第一話、神様の頼み

『魔神』

それは災いをもたらす神、もしくは悪魔である。異教の神や、特に位が高く強力な悪魔を指して『魔神』と称する場合もある。

この話は、そんな魔神の少し変わった物語である。

｝? side ｝

とある書齋、青年が椅子に足を組みながら静かに目を瞑っていた。

「…………グー…………。」

「…………そろそろ起きてくれんかの？」

そう、この青年はある老人に呼び出されたにも関わらず熟睡中であつた。

「……あつ、待って…俺そこ感じや…すい……………」

「どんな夢見とんじゃ……………」

「…ん…？ ああ…悪い、ちょっとウトウトしてた。」

「明らかに夢の中で楽しんでおったがお。」

かてえ事言うなよ…、こちとら徹夜明けなんだぞ？

「お主は徹マンしただけじゃろう。」

「うっ…、知ってたのかよ。」

やっぱりこの爺さんには適わなねえな……………」

「それはさておき…お主に頼みた i 「やだ。」 ……話ぐらい聞いてくれんかの？」

「…分かったよ、聞いてやるよ。」

まあ、どうせ碌でもねえ事だろうな……。

「単刀直入に申す、お主にはある世界へ行ってもらいたい。」

「……つまり転生しろってか？」

「左様。」

おいおいマジかよ…、転生すんの苦手なんだよなあ。

この青年が最も苦手としているものは転生である。その理由は――
――、

『仕事の中でいっっちばんめんどくさい!!』

確かに、天使や悪魔の間でも転生というものは良い仕事とはいえないのが現実であった。

「お主が嫌がる気持ちは分かる。しかしな……、」

老人はそう言いながら深刻そうな顔をしてこう告げた。

「そうせんとその世界は滅ぶ。」

「何…?」

滅ぶ……、あんまり良い響きではねえな…。

「頼むその世界を救ってくれ、この通りじゃ……。」「

老人が青年に対して深々と頭を下げる。

「……………分かった、転生してやるよ。」「

「…すまん、いつも面倒をかける。」「

「気にすんな、他でもないアンタの頼みだからな。」「

そうだ、この爺さんの為なら転生なんて軽いもんだ。

「では、早速だがすぐに行ってもらうぞ。…それと、あまり力を出し過ぎるな。世界が壊れかねん。」「

「ああ任しとけ。」「

俺が本気出しちまったら、天界や魔界でも無傷ではいられねーからな。

「んで、転生先は？」

「お主にはここに行ってもらおう。」

老人が青年に書類を渡した。

「……ハルケギニア？」

「うむ、その世界も儂らと同様に魔法を使っている世界だ。しかし、魔法に頼り過ぎて6000年経った今でも文明が一向に進歩せん。」
「6000年？よく生きていられたな。………待てよ。」

いつになっても進歩しない文明……。もしや……、

「お主が考えておる通りじゃ、進歩せん文明は必ず滅びる。歴史が

そう物語っておる。」

「だが6000年も保ち続けているんだぞ……何故だ？」

「……宗教じゃよ。その世界の人間の全ては一つの宗教しか信じておらん。」

成る程な……だがそれもいずれは……。

「狂信的な信者が何らかの行動を起こすだろうな。」

「うむ……。お主にはそれを最小限で構わん、食い止めてもらう。……頼んだぞ。」

「任しとけて、アンタは爪でも切りながら気長に待ちな。」

「そうしようかの……。ついでに花嫁でも探していけば良いだろう。」

「そうさせてもらうぜ。じゃあ行ってくんぜ……神様。」

「無事を祈っておるぞ……『魔神ゼラ』よ。」

魔神ゼラか……。そう自ら名乗らなくなったのはいつからだろうな……。

そう思いながらゼラは書斎から出て行った。

＼ゼラ side out＼

＼神 side＼

「頼んだぞ魔神ゼラよ……。」

彼なら必ずやり遂げる、何せ儂が認めた男じゃからな。……だが何か言い忘れていたような。

「あつ、使い魔として召喚されるのを言い忘れておった……。」

魔神が使い魔になるとは……。あの男……怒るであろうな。

第一話、神様の頼み（後書き）

難しく書こうとしたら、わけ分かんなくなっちゃいました……。。

第二話、魔神召喚（前書き）

それではどうぞ。

第二話、魔神召喚

『ハルケギニア』

そこはトリステイン王国・ガリア王国・帝政ゲルマニア・ロマリア皇国・アルビオン王国といくつかの小国が存在する大陸である。各国では魔法を使えるメイジが貴族とされ、支配階級となっている。

そんなトリステイン王国にあるトリステイン魔法学院では春の使い魔召喚の最中であつた。

（ルイズ side）

「何で？何でよ！？何で何も出て来ないの！！？」

ルイズが使い魔召喚の呪文を唱えれば、何故か爆発が起きる。

嘘よ……もしかして使い魔すらも召喚出来ないの！？

「ゼロのルイズは使い魔すらも召喚出来ないのかぁ！？」

「サモン・サーヴァントぐらいちゃんとやれよ！」

「僕…何だか疲れてきたよ、パトラッシュ……。」

何よ！みんなあたしを馬鹿にして！！

「アンタ達見てなさい！今からあたしが超絶凄い使い魔を召喚するんだから！！」

「無理すんなよー、どうせ失敗するんだから。」

「うゝゝゝ！！」

アッタマきた！絶対使い魔召喚させてやるわ！！

するとルイズは一度深呼吸をして杖をしっかりと握った。

「宇宙の果てのどこかにいる…わたしの僕よ。神聖で美しく！そし

て…強力な使い魔よ！私は心より求め訴えるわ！……我が導きに応えよっ！！」

そう言いルイズが杖を振ったが、今度はひとときわ大きい爆発が起きた。

「ゲホッゲホッ！また爆発かよ！！！」

「そんな事より成功したのか？」

「ん？…おい何かいるぞ！」

ホント！？だとしたら召喚は成功だわ！！

「ちょっと砂埃で見えないな…、風で飛ばすか。」

一人の男子生徒らしき者が杖を振るうと、砂埃が風で飛ばされてゆき段々と姿を現した。

「さあ！わたしの使い魔は！？」

お願い…、この際もう猫でもフクロウでも何でもいい。だから…召喚されてますように！

「おい…アレって……。」

「ああそうだな……。」

「人だな、しかも平民。」

人？HUMAN？嘘だわ…そんなのあり得ない……。

だが砂埃が晴れるにつれ、その姿が人間である事に気付く。

するとその人間がキョロキョロと辺りを見回しはじめる。

「アハハハ！マジかよルイズ！？」

「平民を召喚とか凄すぎ！」

「流石ゼロのルイズは違うなあ！！」

「……………」

ルイズは周りの生徒からの罵倒を無視しながら、召喚した人間の方へ歩いて行く。

何であたしだけこんな目に遭わなくちゃいけないの？…というか……、

「あんた誰よ！！」

ルイズは自分の心の叫びを召喚した人間に言い放った。

（ルイズ side out）

くゼラ sideく

「あんた誰よ!!」

何だよ人を見るなり怒鳴りやがって、……人じゃないけど。

「ちょっと聞いてんの!？」

「さっきからうつせーぞガキ。」

「ガ、ガキですってえく!」

ゼラとルイズが言い争っていると、紺色のローブを着た中年男性が近づく。

「まあまあ落ち着いてミス・ヴァリエール。早速ですが契約を始めなさい。」

「えっ、でも人間ですよ!？しかも平民……。」

「契約？」

契約……嫌な予感がするな。

「……やり直しは出来ないますか？」

「サモン・サーヴァントは神聖な儀式です。残念ですが諦めてください……。」

「……分かりました……。」

何か俺抜きで話が進んでるな……。

「ちょっと……あんた屈みなさいよ。」

「あ？何でd「いいから!!」は、はい……。」

何だよこのガキ……。親の躰がなってねーな。

するとルイズはふう…と一息ついた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ。」

「使い魔？」

使い魔って確か…、術者の代わりに些細な用事を代行して、主に伝言・届け物・留守番・偵察・戦闘をする……だっけか？

そう思い出した瞬間ゼラは絶叫する。

「ふざけんなあああ!!」

「きゃあっ! なっ、何!？」

ふざけんな! 俺は腐っても魔神だぞ!? 使い魔になるなんて俺のプライドが許せん!!

「使い魔なんて絶対なんねえぞ!!」

「何よ生意気ね! 平民のくせに!!」

「落ち着いてミス・ヴァリエール! ……あー失礼、ミスター?」

「ここの責任者か? なら話は早い!

「おいっるっる! 何だよコレ! いきなり使い魔になれなんてよ!!」

「っるっる…! ……今このトリステイン魔法学院では現在、使い魔を召喚し契約して自身の魔法属性と専門課程を決める重要な儀式をしています。」

「……それで?」

「この使い魔召喚が出来なければ彼女は……進級出来ません。」

んな事言われたって…、魔神が使い魔になるなんてあり得ねーだろ。

そう思いながらルイズを見ると、彼女は大量の涙を流していた。

「おわっ！？何で泣いてんだよ？」

「うるさい！泣いて…なんか……ない。」

「ゼロのルイズは平民すらも従えねーのかよ！！！」

生徒の集団からそんな声が聞こえた。

あー…成る程な。大体分かってきたぞ。

（コイツあんまり魔法使えねーんだな。だからあんな事言われたのかもな…。）

「所詮ゼロのルイズだ」「うるせえ！」ひっ…！？」

力がないから見下す……。ある意味、人間という生き物が一番悪魔に近いな……。

「テメエらは黙っとけや！潰すぞ！！」

「な、なな何だよ……。。」

ゼラは怒りのあまり少し魔力を放ってしまった。

やっべ……ちとやり過ぎたか？まあ……。ガキ共が静かになったから良いか。

「おい……名前何て言うんだっけ？」

「……ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

「長えな……。ルイズで良いか。俺はゼラってんだ。」

「……。。」

「ルイズ、俺は使い魔になる気はない。……今はな。」

「じゃあ……いつなるのよ……?」

『いつなるか』か……、そうだなあ……。

「お前がそうなるに相応しい人間になったらな。」

そう言うとき、ルイズの頭をワシワシと撫でる。

「ちょ、ちょっとお!？」

「ハハ、可愛い奴だ。」

そうだな……この世界を救う為の相棒に、頑張ってもらおうか。

こうして、ゼラはルイズの使い魔（仮）となった。そして、この二人の出会いが後々ハルケギニアに多大な影響を与える事を、まだ誰も知る由もなかった。

第二話、魔神召喚（後書き）

次回は主人公紹介をしようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8603z/>

ゼロの魔神

2011年12月29日01時21分発行